乙女な人形奥様と爽やか騎士様の甘やかな日常

登場人物紹介
エマ
新米侍女。
朗らかな性格で、
主人である
レイチェルを
優しく見守る。
ベリル
レイチェルを
伯爵令嬢時代から
世話するベテラン
侍女。レイチェルの
よき理解者。
メルビス
レイチェルの兄であり、
強大な権力を持つ
ハプテル伯爵。
妹を溺愛している。
ライアン
レイチェルの旦那様で、
優秀な騎士。
誰にでも優しく、
爽やかな笑みを絶やさない。
レイチェルのことが何より大事。
アレクシア
ライアンの直属の上司・
騎士団第二部隊隊長の娘。
天真爛漫な性格で、
いつもライアンに
親しげに接する。
レイチェル
類稀なる美貌を持っているのに
表情筋が全く動かないため、
『妖精の人形』と呼ばれている。
そんな見た目に反して心はとても乙女で、
ライアンのことが大好き。
ヴィーデル卿
国王の甥。
レイチェルに何度も振られているが、
めげずに求婚している。

プロローグ

緑が木々から芽吹き始める、早春の頃。

深い森の中を、馬車が土埃を立て、すごいスピードで通り過ぎていく。その馬車を五頭の馬が荒々しく追いかけていった。

馬に乗った男たちは馬車に追いつくと、三人の護衛をあっという間に剣で刺し殺してしまう。

「ひいぃぃ！　誰か、助けてくれっ！」

馭者は顔を真っ青にして更にスピードを上げるが、男たちを振り払えない。やがて馬に乗った男の一人が馭者の横にピタリと並び、剣を薙ぎ払った。

森をつんざく馭者の悲鳴に驚き、周囲から鳥が飛び立つ。

馬車は止まり、男たちがそれを囲んだ。

その中の一人が馬車の扉を開け、中にいた女性を引きずり出す。服装からすると、侍女のようだ。

彼女は、泣きながら命乞いを始めた。けれども男たちはそれを嘲る。

「こりゃあ、上等な服だ。こんな侍女を連れているのなら、主人のほうも期待できそうだぜ！」

「なんせ、馬車に護衛を三人もつけていやがったからな。よほど高貴な身分のお方に違いない」

彼らは嫌がる侍女の腕を掴んで、振り回して弄ぶ。すると馬車の扉が開き、もう一人の女性が出てきた。その姿を見て、男たちは同時に驚きの声を上げる。
「うわぁ、こいつはすげぇや……！」
その女性は、この世のものと思えないほどに美しかったからだ。
腰まである黄金色の髪は太陽の光を反射して煌めき、きめの細かい肌は白磁のように透き通っている。
その女性は顎を少し上げると顔色一つ変えず、まるで琴の音のように響く声を出した。
「さっさと私を連れていきなさい。でも、彼女を殺せば私も命を絶ちますわよ」
その立ち姿は凛としていて、天使よりも神々しい。
男たちは思わず彼女に見惚れて、言葉を失う。
しばらく沈黙が続いたが、一人の男が思い出したようにつぶやいた。
「……これがあの噂の『妖精の人形』……レイチェル・ハプテルか！」
その直後、馬の蹄の音が近づいてきた。男たちがハッと我に返り、一斉に剣を構える。
彼らの目線の先には、白馬に乗った二人の騎士がいた。
黒色の騎士服の詰襟には刺繍が施され、肩には金色の飾緒が吊るされている。騎士たちは漆黒のマントを翻し、一直線に馬車に向かってきた。
二人のうち片方の騎士は銀の髪と緑の瞳を持ち、目鼻立ちのすっきりした男性。彼は鋭い刃の剣を構えると、馬に乗ったまま男たちとレイチェルの間に突っ込んだ。

そして、彼は人形のように美しいレイチェルの腰を抱くと、馬の上に抱え上げる。
「レイチェル様！　少し揺れますが、しっかり僕に掴まっていてください！」
精悍な顔つきの騎士は、彼女を腕に抱えたまま、男たちを次々と倒していった。もう一人の騎士は、侍女を助け出す。
あっという間に馬車を襲った野盗は鎮圧されて、二人の騎士が乗る馬の蹄の音だけが森の道に響く。
レイチェルは、人形のように表情もなく、抑揚のない声でこう言った。
「どなたか存じませんが、助けていただいてありがとうございます」
「僕の名はライアン・ブルテニアです。あなたの命をお助けできて光栄です。レイチェル様」
ライアンと名乗った騎士は、片腕でレイチェルを抱いたまま白馬の手綱を操り、春の日差しのように爽やかに笑った。
――これが二人の出会いだった。

1　妖精の人形は旦那様にめろめろです

私の名はレイチェル・ブルテニア、二十二歳。

私は二か月前に王国の騎士であるライアン・ブルテニア様と結婚したのだけれど、それは社交界を騒がせる出来事となった。

私たちが暮らすリシュラン王国は、領土の南側のほとんどが海に面していて、大陸でも広大な国土を誇っている。百年前の大戦で大勝利を収めたリシュラン王国は、いまや近隣諸国の中でも強大な軍事力を擁す大国となった。

私の父である前ハプテル伯爵は王国の宰相で、貴族院のトップでもある。

そのため、ハプテル伯爵家は大きな権力と影響力を有し、王国の安定した政治運営の礎を担っている。

けれど、リシュラン王国への周辺諸国からの侵略はあとを絶たない。何故なら、王国は天候と地形に恵まれているからだ。

肥沃な土壌には作物が豊かに実り、それを輸出するための航路や陸路も充実している。

そのため、どの国もリシュラン王国の領土を求め、攻め入ってくる。それを防ぐのが、王国の誉れたる騎士団だ。

騎士団はその仕事ぶりにより、政治の中枢を担う貴族院に匹敵するほど強大な権力を持つようになる。

やがて、大きな力を持つ文の貴族院と武の騎士団は、事あるごとにぶつかるようになった。

私の旦那様になったライアン様は、王国の騎士。男爵家の三男という身分でありながら、若くして優秀だと知られている。

貴族院で絶大な権力を握るハプテル家の娘の私と、将来有望な騎士であるライアン様。

対抗する勢力を象徴する者同士の結婚だったことが、社交界を騒然とさせた。

それだけでなく、もう一つ理由がある。

ライアン様は整った容姿の上に、騎士階級であることを鼻にかけない。爽やかな身のこなしに人懐っこい性格で、自然と周りに人が集まる社交的な男性だ。

それとは逆に、私は人を寄せつけない非社交的なタイプ。

あまりにも似つかわしくない夫婦だと、多くの人に注目されてしまった。

しかも、私には普通の女性にはない特徴があるのだ。

腰まで伸びた黄金色の髪に、透き通った陶器のような白い肌。瞳は青とも緑とも紫ともつかない微妙な色合いで、妖艶な雰囲気を醸し出している、とみなが言う。

それで、結婚した今でも『妖精の人形』と呼ばれているのだ。

けれど人形と揶揄される理由は、美しさだけではない。父と母の優れた遺伝子を受け継ぎ、完璧な美人と称賛される私だけれど、足りないものが一つある。

それは表情筋だ。
生まれたときから、表情が豊かでない子どもだと思われていたようだが、大きくなるにつれそれが顕著になった。泣き顔も、笑顔も上手く作れない。
幼い頃、必死に訓練をしたが、私の表情筋は固まったままピクリとも動かなかった。その理由として、思い当たる節がひとつある。
私は父が四十五歳、母が三十九歳のときに生まれた。それまで両親の子どもは兄一人。
両親は子どもを授かるのは無理だと諦めていたらしい。そんなときに、思いがけずできた私は、彼らにとって奇跡の子。
もちろん両親は目に入れても痛くないほど私を溺愛した。しかも、二十一歳年の離れた兄も同様だった。
彼らは私の成すこと全てに、それは大仰に反応する。
転んだだけで、私の前に彼らが号泣するのだ。彼らが代わりに感情を表現してくれるのだから、私はそうする必要がないと脳が判断したのだろう。
気付けば、無表情の私ができあがっていた。
そんな人形のような冷たい見た目のせいで、誰も私に近づいてこない。もともと人見知りでもあり、ますます人付き合いが苦手になってしまった。
十八歳になり成人して社交界に顔を出すと、そんな私にも声をかけてくれる男性が現れた。
でもその大半は、ハプテル伯爵家の名誉や財産、あるいは私の容姿に目がくらんだ、自尊心が異

様に高い自意識過剰な男性。
そんな男性の誘いをバッサリと断れば断るほど、彼らは『美貌を笠に着た、高飛車で冷たい女だ』と、私の悪評をばらまいた。その結果、私は更に孤立するようになってしまった。
このままでは素敵な男性と出会えないと、とても悲しかった。
だって、人形の顔とは裏腹に、心の中は普通の人よりも繊細で、常に揺れ動いている。ただ、それが表情として表れないだけ。見た目は感情のない人形でも、中身は恋愛に憧れる乙女なのだ。
私の理想の男性は、子どもの頃読んだ『リシュラン王国と救国の騎士』という絵本に出てくる、銀色の髪に緑色の瞳の騎士様。私はその騎士を『運命の騎士』と呼んで、彼のような男性をずっと探していた。なのに、どんな男性からも敬遠されてしまう。
そんな日々が続いたので夜会に出席するのも憂鬱になり、四年ほど社交界から遠ざかっていた。
もう一生結婚できないと思ったけれど、ついに『運命の騎士』に出会ってしまった!!
そう……あれは四か月前のこと。
私は馬車で森を通っているとき、野盗に襲われた。
護衛はすぐに野盗に倒され、侍女は無理やり馬車の外に引きずり出された。私も五人の男たちに囲まれて、もう駄目だと覚悟したとき、馬に乗ったライアン様が颯爽と現れたのだ。
彼は私を軽々と抱き上げ、自分の膝の上に乗せた。そうして私を片腕で抱きながら、襲ってくる野盗を次から次へと倒した。
私を守ってくれる、爽やかで誠実そうな騎士様。その上彼は、絵本の騎士と全く同じ、銀色の髪

に神秘的なエメラルドグリーンの瞳の男性だった。
私の理想の人が実在したのだ。恋に落ちるなというほうが無理。まさに一目惚れだった。
しかも彼は、私や侍女にも誠意ある態度で接してくれた。いつも男性に敬遠される私にとって、ほとんど初めての経験だった。
もう一度ライアン様に会いたいけれど、どうすればいいだろうとぐずぐず悩んでいると、何故か彼のほうからお父様に結婚の申し込みがあった。
信じられないことに、ライアン様も一目で私を好きになったのだという。
夢のような展開に、はじめは耳を疑った。ようやく現実に起こったことだと理解したとき、表情筋は動かないけれど、心の中は狂喜乱舞だった。
将来有望で、見目麗しい若き騎士。そんな彼を密かに想う女性は、大勢いたと聞いた。
ライアン様はその全てを断っていたという。
なのに、出会ったばかりの私を奥様に選んでくれた。私のような内向的な人間が彼と結婚できたなんて、今でも奇跡だと思う。
（どうしましょう！　大好きなライアン様と毎日同じ家で暮らすことができるなんて！　あぁ、私、とても幸せだわ！）
一生分の幸運を使ったと、桃色の心地で浮かれていたけれど、ふと一抹の不安が芽生えた。
ライアン様は、一体私のどこを好きになったのだろう――
結婚の申し込みを受ける前に、私とライアン様はそんなに会話していない。野盗から助けてもらったあと、お医者様に診てもらってお迎えが来るまでの間、ほんの少し言葉を交わしただけ。しかもライアン様に一目惚れして気持ちが高揚していたので、普段よりもそっけなかったのだった。
野盗から助けてもらったときも、私は無表情の人形だったはず。そんな私に恋をしたということは、ライアン様は感情を表情に出さない女性を好むに違いない。
しかも冷たくあしらわれるのがきっとお好きなのだ。今までの男性たちも、私を冷たい女だと思っていたから。
（あぁ、私の中身が乙女だと知られるわけにはいかないわ。ライアン様のお好きな『妖精の人形』のままでいないと、嫌われるかもしれない！）
私は彼好みの女性でい続けるため、ライアン様の前では更に無表情になるよう努めた。
意識しても感情が表情に出ない私にとって、それはそう難しくない。ライアン様を好きだと意識すればするほど、つれない言葉で返してしまうのも好都合だった。
本当の私を決して見せないと、固く決意した。

そんな努力が実ったのか、現在は結婚して三か月目。ライアン様と過ごす初めての夏を迎えようとしていた。私たちは二人の新居で、砂糖菓子よりも甘ーい新婚生活を送っている。
『運命の騎士』であるライアン様は、毎日のように私を愛していると言ってくれる。
（うふふ、本当にこれ以上ないほど、最高の旦那様だわ！）
王都の端にある私たちの新居は、ライアン様が用意してくれた。お父様は伯爵家の隣に豪邸を建

ててやると言ったのだけれど、ライアン様が『自分の給金だけで生活したい』と固辞したのだ。
ハプテル伯爵家の財産目当てに私に寄ってくる男性は、大勢いた。だけど、ライアン様はハプテル家の援助を全く受けない。
そんなライアン様への愛情が更に高まる。
（あぁ、素敵！　素敵です！　なんて堅実な男性なのでしょうか！）
私たちの愛の巣は、三階建てのレンガ造り。白く塗られた壁は薔薇の蔓で飾られている。一階にはダイニングルームとギャラリーと応接室、それとキッチンと庭のテラスに続くサンルームがある。二階には夫婦それぞれの部屋があり、バスルームを間に挟んで繋がっている。あとは客室と書斎が一室ずつ。三階の屋根裏は住み込みの侍女たちの部屋だ。
お父様に言わせれば馬小屋のように小さな屋敷らしいが、私にとっては天国よりも居心地がいい。ハプテル伯爵家の屋敷に比べたら狭くとも、王都の屋敷の中では広いほうだ。ライアン様ははっきりとした金額を言わないが、ずいぶんと値が張ったに違いない。貴族の三男で騎士とはいえ、役職がなければ給金はそう高くない。彼がだいぶ無理をしたのは明白だ。
しかも、ここからハプテル伯爵家までは馬車で十分ほどだ。私が里帰りしやすいだろうとライアン様が考えてくれたから。彼の細かい配慮に感動する。
（なんといっても、ま・い・に・ち、ライアン様のお顔が見られるのですもの！　うふふふっ）
あまりに幸せすぎて、時々大声で叫びたくなるほどだ。
今日も、愛する夫のライアン様のお顔を見て一日が始まる。

目が覚めると、すぐ傍に銀色の睫毛があった。
鼻筋はスッと通っていて、薄い唇は少し開いて子どもっぽく見えた。
レースのカーテンから漏れる日差しに照らされたライアン様の寝顔。それを見ているだけで、一瞬で満たされる。
（あぁ、なんて素敵なお顔なのかしら。睫毛の一本一本が銀の糸のように輝いているわ。それに薄いピンク色をした形のいい唇。この唇で私の名を呼んでくださるのね……ほうっ……夢みたいだわ）
ライアン様の吐く息が、空気中で薄くなってしまうことさえもどかしい。私は顔をできるだけ近づけて、ライアン様の唇付近の空気を一生懸命吸う。
何度も深呼吸をして感動に浸っていると、ここがライアン様の寝室だということに気が付いた。
（あらっ？　昨日は自分のお部屋で眠ったはずなのに、おかしいわ……）
ライアン様が隣にいることが幸せすぎて、すぐには気付かなかった。
夜の営みがあってもなくても、私は自室で眠るように心がけている。それは愛するライアン様に、寝顔を見せないための努力。
今日のように、自室で寝たはずが彼のベッドで目覚めることがままある。そういうときは、自然に彼より先に目が覚めるから驚きだ。きっと私の本能がそうさせるのだろう。
（万が一、ライアン様に涎の垂れた顔なんか見られたら大変だわ。『妖精の人形』のイメージが台なしだもの。あぁ、でもお傍から離れるのは胸が張り裂けそうなほどに辛い。でも、愛しの旦那様

が目を覚ます前に、自分の部屋に戻らなくてはいけないわ）
彼の寝姿を見ていたい欲求を、ぐっと抑える。
何度も言うが、私の心の中はこの世のどんな乙女よりも乙女なのだ。
ライアン様を起こさないよう気をつけて身をかがめると、私は聞こえないほど小さな声で囁いた。
「おはようございます、ライアン様。心から愛していますわ」
私は未練を振り払ってそっとベッドから抜け出し、バスルームを通って自室に戻る。
それから侍女のベリルを呼んで化粧をして髪を結い、ドレスを着るのを手伝ってもらった。
ベリルは私が伯爵家にいた頃からの侍女で、給金が下がるにもかかわらず、結婚してからもついてきてくれた。細身で、ひっつめの髪をお団子にして後ろにまとめているのが似合う。そんな彼女は、フリルのついた侍女の服がなんだか子どもっぽいと、最近愚痴を零すようになった。そんな彼女のことが私は大好きで、全面的に信頼している。
ライアン様が目覚めるまで、自室で本を読んだり縫いものをしたりして待つのが私の日課だ。
ベリルが退室すると、洋服の間にしまってある絵本を引き出しから取り出した。それは幼い頃からのお気に入りで、ずっと大事にしている絵本。『リシュラン王国と救国の騎士』だ。
冷たい『妖精の人形』は、子どもの頃に読んだ絵本など大事にしないだろう。イメージを壊すのが怖くて、ライアン様にはこの絵本のことを内緒にしてある。
表紙には、銀の髪に緑の瞳をした騎士が天に剣を掲げ、炎を吐くドラゴンと戦っている絵が描いてある。何度見ても、その騎士はライアン様にそっくりだ。野盗から助けられたとき、絵本から騎士が抜け出してきたのかと思った。
「本物のライアン様を見られないときは、この絵本で我慢しましょう」
そうつぶやいて、その表紙の騎士に頬ずりをする。ちょっぴり甘酸っぱくて、幸せな気持ちになった。
「奥様、朝食のお支度ができました」
ライアン様の支度が済んだようで、ベリルが私を呼びに来た。ライアン様のお顔が見られるのだと心が騒ぐが、それは表情には出ないし、声色にも一切出さない。
「わかりました」
抑揚のない一言を発して、ベリルとダイニングルームへ向かう。
そこには、夏の朝の瑞々しい日差しがたっぷりと注いでいた。けれども太陽の光なんて、ライアン様の放つ輝きには全く比べものにならない。
彼の顔はあまりにも眩しくて、私は長く直視できないのだから。
私は胸を高鳴らせながら、いつものように彼から一番離れた席に腰かけた。
四メートルの長方形のテーブルの端と端に、私たちは向かい合って座る。この不自然な配置は、私がお願いして特別にそうしてもらった。私の心臓が持ちそうにないからだ。
けれど、やっぱりライアン様のお顔が見たい。私は覚悟を決めて、そっと彼を見る。
すると、みるみるうちに細胞が覚醒して騒ぎ始めた。
グレーの騎士服を身につけたライアン様は、私の理性が弾けそうなほど格好いい。

（あぁ！　できれば肩についている飾緒になって、一日中お傍にいたいです！　最高の角度でお顔を見ていられるもの。騎士服がこんなに似合う男性は、彼以外にいないわ！　あぁ、眼福ぅぅ！）
私はすぐに目を伏せて、このように無表情のまま心の中で悶えるのだ。そのあと、全く興味がないというように装って、平坦な口調で問いかける。
「ライアン様、今日のご予定をお伺いしてもよろしいですか？」
もう一度顔を上げると、優雅にパンと果物を口に運ぶライアン様が見えた。
その瞬間、胸の奥がきゅぅぅんっと締めつけられる。
（あぅぅぅ、痛っ！）
私は胸に手を当てて、一秒も経たない間に彼から目を逸らした。
（はぁっ、はぁっ、駄目だわ。ライアン様が素敵すぎるせいで、こんなに離れていても、意識が遠くなってくるわ。でも、ライアン様の前で気を失うわけにはいかないのよ）
人形のような顔の裏で、私がそんなことを考えているとは露ほども思わないのだろう。ライアン様は、透き通った声で答えた。
「今日はバートラム隊長と一緒に騎士団本部に行って、午後は後輩と訓練をしてから帰ってくるよ。でもどうして？　いつもは僕の予定なんか聞かないよね？　でも、君が僕のことを気にしてくれるなんて嬉しいな」
昇天しそうなほどの、イケメンボイスが私を襲う。
全身がぽかぽかとあたたかくなって、脳がちりちりと焼けつくようだ。

（駄目よ、レイチェル！　他のことに意識を集中するの。理性で心を落ち着かせるのよ！）
そう自分に活を入れ、淡々とした声で言う。
「今夜は、ボルネリ王立劇場でオペラがあるらしいのです。席を用意していただいているようですわ。夜の八時からと聞いております。お忙しいようでしたらお断りいたしますが」
「それなら是非一緒に出席しよう。演目はなんなの？」
「さあ、なんだったかしら……ご一緒できると思いませんでしたので、よく見ていませんわ。あとで確認しておきますわね」
本心とは裏腹に、関心がないと言わんばかりの冷たい声を出した。
これは嘘だ。実は演目どころか、出演者の名前まで把握している。ライアン様と外出できるかもしれないと、とても楽しみにしていたからだ。
でも、それをライアン様に悟られてはいけない。彼の好みは無表情で冷たい、人形のような女性なのだから。
ライアン様はそんな塩対応の私にも笑顔を崩さない。
「ふふ、そうなんだ。あとで教えてくれたらいいよ。どうせ演目なんてなんでもいいんだ。一緒に出かけるなんて久しぶりだから楽しみだね、レイチェル」
（うわぁぁ、なんて素敵な笑顔なのかしら。とろけてしまいそうだわ……ほぉぅ。さすが私の旦那様）
心の中ではにやけまくっているのとは対照的に、努めて冷静に答えた。

「ええ。わかったらお教えしますわ。いつになるかわかりませんけれども」
「あぁ、無理に調べようとしなくていいよ。大事な君を煩わせるつもりはないからね。あぁ、もうこんな時間だ。じゃあ仕事に行ってくるね。今夜の君とのデートを楽しみにしているよ」
そう言って彼は席を立ち、私の前まで歩いてきた。そして私の肩に手を置き、腰をかがめて唇にキスをしようとする。
(ひゃぁぁぁっ！)
急なことに脳の伝達が追いつかない。あまりにテンパってしまって顔を横に向けてしまう。ライアン様のキスは、唇ではなく私の頬に落とされた。
(あぁっ！　本当は唇にキスしていただきたかったのに！　私ったら馬鹿っ、もったいない！　反射的に避けてしまうなんて！)
ライアン様の柔らかい唇の感触が頬に当たり、彼のカールした髪が耳にさらりと触れては離れていく。ライアン様の匂いが香ってきて、ドキリと心臓が跳ねた。
(あぁ、なんていい香りなのかしら。幸せすぎて涙が出そうだわ……ほぅっ)
そう思うけれど、表情筋が死んでいるので涙なんてもちろん出ず、相変わらず無表情のままだ。
「ふっ……愛しているよ、僕の可愛い奥様」
そう言って爽やかに笑うライアン様に応えようと、私は視線だけで彼を見た。これが精一杯だ。自分の心臓の音が大きくなりすぎて、他に何も聞こえない。
(きゃぁぁ！　ち、近いですぅ！　でもなんて格好いいのでしょうか！　彼が私の旦那様だなんて

いまだに信じられないわ！　萌えすぎて私の心臓が持ちそうにありません)
私は心の中で右往左往しながらも、抑揚のない声で挨拶を返した。
「行ってらっしゃいませ、ライアン様」
「行ってきます。レイチェル」
(あっ、待って！　行かないで！　もう少し私の傍にいてほしいのにっ……あぁ！　行っちゃった……うぅ)
身を翻して軽やかに去っていくライアン様の背中を、はち切れんばかりの想いを胸に秘め見送る。
毎朝のことだけれど、彼の背中を見るのは、いつも身を切られるように辛い。
しばらく寂しさに浸っていたが、彼がいなくなるとようやく鼓動が落ち着いてきた。
(そうだわ、目に焼きつけた今朝のライアン様の姿を、新鮮なうちに思い返しましょう)
そっと目を閉じると、先ほどのライアン様の騎士姿が瞼の裏によみがえってくる。
(私の旦那様は、本当に騎士服がよく似合うわ。うふふ)
心の中だけニマニマして、きゅんきゅん萌える。
私は騎士服姿のライアン様が一番お気に入りなのだ。詰襟の騎士服で剣を構えた彼を思い返すだけで、気絶しそうになる。
そういえば初めてライアン様を見たときは、絵本と同じ漆黒の騎士服をまとっていた。
ライアン様のベストショットが、次々と脳裏を過る。そのどれもが素敵で、胸がときめいた。
しばらく浸ったあと、ようやく満足して目を開ける。

するといつの間にか侍女のベリルとエマが私の傍に立っていて、何か言いたそうにこちらを見ていた。
その憐憫のこもった視線を感じるだけで、彼女たちの言いたいことが伝わってくる。
侍女は普通、主人と一線を引いて接するものだ。けれども我が家の侍女は違う。私たちの間には秘密を共有する者同士の、いわば仲間意識のようなものが存在する。そのため、彼女たちは私に全く容赦がない。
無言の圧力に屈した私は、いたたまれなくなって声を上げた。
「わかっているわよ、ベリルにエマ。でも、私がそれを口にしては駄目なのよ」
「……私も愛していますと返すのが、どうして駄目なのですか？」
侍女のエマが呆れたように言うので、思わず心の中で泣きそうになる。
「駄目なのよ。だってライアン様は冷たい人形である私を好きになってくれたのだもの。私がライアン様にベタ惚れで、いつだってきゅんきゅん胸をときめかせているなんて、知られてはいけないの」
そんな私に、ベリルは大きなため息をついた。
「お言葉ですが、奥様。旦那様だって、たまには愛の言葉を聞きたいと思われていますよ。たとえ奥様がツンデレだとしても、百回に一回はデレがなくては成り立ちません」
「そ、そんなことないわよ。ライアン様は乙女な私なんてお好きではないもの」
「いいえ、そんなことはありません。ずっと北風に吹きつけられてばかりでは、旅人は去ってしまいます。たまの太陽のあたたかさがあってこそ、北風の寒さが引き立つのですよ。同じような態度ばかり取っているといずれ飽きられて、旦那様も心変わりをしてしまうかもしれません。奥様の甘い言葉を聞けば、一層いつもの冷たさが際立ち、お喜びになるのでは？」
「……そういえば、結婚する前からずっと、私はライアン様にそういうことを言ったことは一度もないわ」
一生に一度のプロポーズの返事でさえ、『そうですか。わかりましたわ。では、よろしくお願いいたします』というそっけなさだったのだから。
ベリルはさっき、ライアン様がいつか心変わりしてしまうかもしれないと言った。
（あぁっ！　そんなの絶対に無理ぃ！）
想像するだけで暗雲が心を覆いつくして、世界が終わった気分になる。なのに私の表情には何も表れない。心の中では床に崩れ落ちて大声で泣き叫んでいるのに、口角は上がらないし目尻も一ミリたりとも下がらないのだ。
「飽きられるのは……絶対に駄目だわ。もうライアン様なしでは生きていけないもの……でも、デレてみて『冷たい君が好きだったのに』と言われたらどうすればいいの？　それに、デレるってしたことがないわ。だってライアン様が私の初恋なんだもの」
あまりに不安で、疑問が口を突く。
すると、エマがにっこりと笑って人差し指を立てた。
「ただ、愛しているとだけお伝えすればいいのではないでしょうか？　どんなに人形のような女性

が好みでも、奥様に愛を伝えられて嬉しくない旦那様なんていませんよ」
そんなことが簡単にできたら苦労しない。
「人形が好きなのであれば、感情の出ない顔で愛していると言う分には、喜んでくださるかしら？でも、一度そう言ってしまうと、止まらなくなってしまいそうよ。『ライアン様の細胞を、余すところなく食べたいくらい愛しています』って言いそうだわ。……でもそんなことを言ったら確実に嫌われてしまうわね」
私が真剣に悩み始めると、ベリルが呆れたようにため息をついた。
「はぁっ……本当に難儀な性格ですね。奥様は難しく考えすぎるのですよ。少しでも旦那様の近くにいたいと思っておられながら、こんな風に席を離してしまいますし」
ダイニングテーブルの席のことを言っているのだろう。それはもっともな意見だ。
でもあまりにライアン様を愛しすぎて、近くにいると動悸が速くなり息苦しくなる。たまにならいいが、毎日のことだ。せっかく愛するライアン様と結婚できたのに、心臓発作で死んでしまっては元も子もないから、席を離すしかないのだ。
居たたまれなくなった私は、開き直ることにした。
「放っておいてちょうだい。どうせ、私は見かけは人形なのに思考が乙女すぎるのよ。こんなことなら外見だけでなく、心の中も人形のように冷めていればよかったのに。それなら、ライアン様の好み通りの女性だったわ」
侍女たちは、沈黙することで私の意見に同意する。自分で言ったことなのに、彼女たちの反応で

更に落ち込んでしまった。
「……ライアン様が屋敷を出られたのなら、私も着替えるわね。このドレスは高価なくせに、染みがつくと取れないの」
心は半泣きの状態のまま自室に戻って、いつもの洗いやすい廉価なドレスに着替える。
このドレスは綿なので、動きやすい上に汚れてもすぐに水で洗えば落ちるのだ。そしていつものように作業を始めることにした。
この屋敷には、住み込みの侍女であるエマとベリル、通いで来るシェフと庭師以外に使用人はいない。
伯爵家で暮らしていたときには、私付きの侍女だけで十人は超えていた。でも、ここではそんなことはできない。使用人を一人雇うだけでも、お金がかかるから。
ライアン様の給金ならもう少し使用人を増やせるけれど、彼が命を懸けて稼いだお金をそんな風に使うのは気が引ける。無駄遣いはできるだけ抑えたかった。
幸いライアン様も「僕のことなら侍女が一人いれば充分」と言ってくれたので、私が連れてきたベリルに加えてエマを雇った。
エマは侍女として働きはじめてまだ数年だが、いつも朗らかで明るく、ライアン様も気に入っている。
こうして、私たちの結婚生活はスタートした。
使用人が少ないからといって、ライアン様の財産である屋敷の管理を疎かにはできない。そこで

私は、自分自身で屋敷の掃除をしようと思いついた。
ライアン様との愛の巣を、自ら綺麗にしたいという気持ちもある。掃除は節約になるだけでなく、私にとってご褒美のようなものだ。
幸い私は表情筋を動かすこと以外は器用で、すぐにコツを掴むことができた。
伯爵家にいた頃はもちろん掃除などしたことがなかったけれど、結婚して丸二か月で、大抵のことはこなせるようになった。
その結果、節約ができるし、意外なことに主人の私が掃除に参加することで、使用人たちもスムーズに仕事を進められるようだ。
物音を立てないよう気を配る必要がないから。おかげで作業効率がぐんと上がった。
そういうわけで、我が家の侍女たちと私はただの主従関係ではなく、心を許せる友人のようなもの。屋敷に引きこもってばかりの私にとって、二人の存在はとても嬉しい。
私が廊下に出ると、エマが張り切って腕まくりをしていた。
「奥様、今日は何をなさるのですか？」
「そうね、窓ガラスを拭いて、庭で花をとってきて玄関に生けましょう。今夜観劇に着ていくドレスも用意しないといけないわね。それに、今日の午後はハプテル家の屋敷に行かなければならないし、忙しくなるわ」
両親とお兄様は、私とライアン様の結婚を許すにあたって条件を出した。それは、週に二日、一時間、私がハプテルの屋敷で一緒にお茶を飲むというもの。私を溺愛してやまない彼らは、その日

をことさら楽しみにしている。
私は心の中で大仰にため息をつくと、いつものように侍女たちと一緒に窓ガラスを拭き、玄関に花を生ける。ライアン様の喜ぶ顔を思い浮かべていると、あっという間に終わってしまった。
そのあと、今夜のドレスを決めるために自分の部屋に向かう。
私の部屋には、扉を開けるとすぐに長椅子とテーブル、ちょっとした書きものができる机と本を並べた棚がある。奥にベッドとワードローブのある小さな寝室だ。
エマが私のワードローブの扉を開いて振り返った。その中には、ドレスがぎっしり詰まっている。
「それで、今夜のドレスはどうなさいますか？　奥様ならなんでもお似合いになると思います。この間お召しになられた、黄色のシルクのドレスにされますか？」
貴族の令嬢は目ざといから、一度着たことのあるドレスにすると、口さがない人たちにライアン様のことを悪く言われるかもしれない。
そうでなくても身分差のある結婚だったのだ。私たちには、好奇の目が多く向けられている。私が勝手にしている節約のせいで、新品のドレスを買うお金すら稼げない旦那様だなんて言わせたくない。
私はしばらく考えたあと、いつものようにドレスを直すことに決めた。
「確かそこに、前に着た青のタフタのドレスがあったでしょう？　袖を少し短くして胸元にリボンを飾れば、違うドレスに見えるはずだわ。古い藍色のシルクのドレスに、ちょうどいい色合いのリボンがついていたはずよ。伯爵家で暮らしていた頃のドレスが山ほど余っているのだもの。せっか

くだし使わなきゃね」
「奥様、ここにとても綺麗なオーガンジーのドレスがありますけど、これはどうですか？　とてもお似合いだと思いますよ」
そう言ってエマが出してくれたのは、透明感のある夏空のような青色で素敵なドレスだ。けれど、私は首を傾げる。
（おかしいわね、こんなドレス持っていたかしら？　あぁ……でも結婚前は、私を溺愛するお父様とお兄様が競ってドレスを贈ってくださっていたから、きっと存在を忘れていただけなのね。それにしても、なんて綺麗な青なのかしら）
せっかくなのでそのドレスを手に取り、引き出しから裁縫セットを取り出す。結婚してから外出するたびに、ドレスのプリーツを増やしたり袖を短くしたり、リメイクしている。狙い通り、毎回ドレスを新調していると周囲は勘違いしているようだ。
ライアン様の、旦那様としての株も上がるに違いない。
私はウキウキしながら、しつけ糸を外す。それも、もう手慣れたものだ。
「ほら、もうできたわ。これにサファイアのネックレスと髪飾りを合わせれば、今夜は大丈夫ね」
それを聞いて、侍女のベリルがため息をついた。
「はぁっ……本当に残念です。名門ハプテル伯爵家の令嬢だった奥様が、繕いものまでして尽くしておられるのに、旦那様には全て内緒だなんて……節約なさったお金は、旦那様のものを買ったり旦那様のお名前で貯めておられるのでしょう？」

私は周囲を見回してから、心の中で眉を顰める。
「しっ……ベリル。彼に言っては駄目よ。こんなことライアン様に知られたら、理想の奥様じゃなかったって離縁されかねないわ。彼はつれない人形のような女性が好きなのよ。尽くす女性はお好みじゃないわ」
するとエマがにこやかに同意する。
「確かに、奥様は一貫して氷河期のような態度しかとっておられないのに、それでも旦那様は変わらず、奥様を愛していらっしゃいますしね」
――旦那様は変わらず奥様を愛している。
その台詞を本人に言われたわけでもないのに、心がニマニマしてしまう。
「そうよ、それにやってみると案外楽しいものよ。ドレスのデザインを考えたり銀食器を磨いたりするのが、こんなに面白いなんて知らなかったわ。私はライアン様の奥様としてのお付き合いすら上手くできないのだもの。これくらいしないと、いたたまれないわ」
というのも、私には全く社交のスキルがないのだ。
貴族の奥様方が集まるお茶会に数回参加してみたものの、失敗に終わった。
私が話しかけると、相手は萎縮して黙り込んでしまう。お茶会の雰囲気を台なしにするわけにはいかないので、それ以来断るようにしていた。
けれどもお優しいライアン様は、私が社交の場に出るのを強いない。
『僕は王国に仕える騎士だけど、爵位があるわけじゃない。だから君が社交に気を遣う必要はない

よ。必要な付き合いは僕がするから、レイチェルは無理に社交界に出なくていいんだ』
ライアン様はそう言って笑ってくれた。本当に思いやりの深い男性だ。
とはいえ、さすがに全ての招待を断り続けるわけにはいかない。
だから、今日のような観劇や音楽会など、お茶会ほど人と交わらないものには、できるだけ夫婦で参加するようにしている。
私は一息つくと鏡の前に立って、出来上がったドレスを体に当ててみる。
上出来だ。これなら古着のドレスを使い回しているとは、誰も気付かないだろう。
今夜の観劇は、久しぶりの二人での外出。今からウキウキして、胸が高鳴る。
（これってデートよね。ふふっ、嬉しいわ）
「ふふふふふ」
思わず声が出てしまう。すると、エマがびくりと肩を震わせた。
彼女は声は笑っているのに顔が全く笑っていない私の姿に、まだ慣れていないらしい。
一方のベリルは、そんな私を見て苦笑いした。
「本当に奥様は旦那様を愛していらっしゃるのですね。ふふ」
「当然よ。大好きなライアン様と結婚できて、私は本当に幸せだわ。一生分の幸福を使い切ったんじゃないかって、不安になるくらいよ。だからご褒美に少しだけ……いいわよね、ベリル。今日も頑張ったもの」
「またですか？　奥様」

ベリルが呆れた声を出す。私は強くうなずいた。
「だって、これをしないと、ライアン様不足で死んでしまいそうなのですもの！　朝から、もう五時間もお会いしていないわ」
私はエマとベリルの冷たい視線を無視して、バスルームを抜けてライアン様の部屋に入った。
（そう……この部屋の空気も悪くはないけど、これに敵うものはないんだもの）
ベッドの脇にあるライアン様のワードローブの前まで来ると、大きく一回息を吐いてその扉を開けた。
その瞬間、全身がぱぁぁぁぁっとライアン様の匂いで包まれる。まるで抱きしめられているようだ。
「あぁっ。ライアン様っ。今死んでも悔いはないわ」
胸いっぱいに息を吸って、全身の細胞の隅々まで彼の匂いを染み渡らせる。じぃんと涙が出そうになった。何度も深呼吸を繰り返す。
「すぅぅぅぅっ！　はぁぁぁっ！　すぅぅぅぅっ！　はぁぁ！」
「……立派な変態ですね。奥様」
私の背後でエマがつぶやいた。そんなことを言われて怯む私ではない。
彼女たちのことは無視して、私は愛する旦那様の香りを思い切り堪能した。
夏の雨上がりの空と秋の夕暮れの風が混じったような、ライアン様の香り……。心の奥があたたかくなって、幸福感で満たされる。

そうして数分後、私は名残惜しみながらも扉を閉めた。
「これ以上は駄目だわ。理性が利かなくなりそうよ。王国中の一人一人のお家を回って、ライアン様が大好きだと伝えたくなるもの。胸が痛くて死んでしまいそうだわ」
「奥様……それだけは絶対におやめください」
ベリルが呆れた顔で言った。本当にそっけない侍女だ。私は心の中でほんのちょっとだけむくれた。
それから使用人たちと一緒にお昼をいただく。ちょうど食べ終えた頃、ハプテル伯爵家の馬車がやってきた。金の装飾に繊細なオークの細工。名門ハプテル伯爵家の馬車だと、一目でわかる豪華さだ。
王城でどれだけ重要な仕事があろうとも、両親とお兄様は私に会うことを優先する。何があっても私を来させるため、こうして時間になると、いつも豪華な馬車が迎えに来るのだ。しかも護衛付きで。あまりにも仰々しいので目立って仕方ないが、彼らの気持ちはわかるので受け入れるしかない。
「レイチェル様、お迎えに参りました」
いつもの馭者と必要以上の数の護衛たちに促され、私は侍女たちとともに伯爵家へ向かう。
十分ほど馬車に揺られて屋敷に着くと、すでにお父様とお母様、お兄様が玄関で待っていた。
その背後には、使用人たちがずらりと一列に並んで立っている。
使用人たちが揃って頭を下げる中、両親とお兄様が歓声を上げた。馬車から降りるなり、身動きが取れないほどきつく抱きしめられる。
「レイチェル！　ああ、元気そうだ。相変わらずなんて超絶美人なんだ。眩しくて目がくらみそうだぞ」
「こんなに美しい妹がいるなんて、俺は世界一の幸せ者だ!!　レイチェル、ああ、顔をよく見せてくれ」
そう言うお父様とお兄様だけでなく、お母様までハンカチを手に涙ぐんでいる。
「レイチェル、あなたに会えて嬉しいわ。少し髪が伸びたのかしら。ますます綺麗になって……あぁ」
あまりの熱烈歓迎ぶりにため息をつくしかない。私は彼らを窘めるように言った。
「お父様、メルビスお兄様。それにお母様もおやめください。つい三日前にお会いしたはずです。それにメルビスお兄様には、ご自分の子どもがいらっしゃるでしょう。いつまでも妹にかまけるのはどうかと思います」
するとメルビスお兄様が、私の顔を穴があくほど見つめる。
「何を言っている。レイチェル、お前の美しさは三日前よりも更に増している。お前以上に美しい女性は、今まで見たことがない。それに、確かに俺には自分の子が四人いるが、揃いも揃って男子。しかもあいつらはもう成人して、好き勝手やっている。俺が唯一無二の大事な妹にかまけて何が悪い！」
お父様もそうだといわんばかりに大仰にうなずいた。

「そうだぞ、レイチェル。どうだ、あの男は……ライアン君は、お前を大事にしてくれているのか？　何かあったらすぐに伯爵家に戻ってきていいのだぞ。お前がいなくなったこの屋敷は、本当に寂しくて味気ないのだ」

普段は他の貴族たちに恐れられるお父様が、縋るような目で私を見る。相変わらずの溺愛ぶりだ。使用人は慣れたもので、その様子を遠巻きに見守っている。

「お父様、私はライアン様を愛しています。それに、ライアン様は最高の旦那様です。私がこの屋敷に戻ることは絶対にありませんわ」

私がそう断言すると、お父様は寂しそうな顔で目に涙を溜めた。可哀想だけれど、少しきつめに言っておかなければいけない。

彼らは私を溺愛しているだけなのだけれど、放っておくと何をするかわからない。

私のためならばと、街一つ買い占めた前歴があるのだ。私は誰の視線も気にせずに、ゆっくり買いものがしたいと言っただけなのに。

私は心の中で呆れながら、みんなに押されるようにして屋敷の中に入った。すると、テーブルの上に豪勢なお菓子が隙間もないほど並べられている。私のために、お父様が珍しいお菓子を取り寄せてくれたらしい。

「可愛らしい形ね。香りもいいし、とても美味しそうだわ。ありがとうございます、お父様」

（余ったお菓子はライアン様のために包んでもらいましょう。夕食のデザートにお出ししたら、すごく喜んでくださるに違いないわ。ふふふ）

そんなことを考えながら、私はいつものように過保護な両親とお兄様とのティータイムを楽しく過ごした。

2　旦那様とのデートはいつでも胸きゅんです

私が伯爵家から戻ってしばらくすると、ライアン様が帰ってきた。いつもより早く仕事が終わったらしい。

軽く夕食を済ませ、私たちは馬車に乗ってボルネリ王立劇場へ向かう。

騎士服を脱いでフォーマルな服に着替えたライアン様も、やはりとても素敵だ。ラインの入ったブルーグレーの上着に、オレンジ色のタイがよく似合っている。

（あぁ、この素敵な男性が私の旦那様なのよ！　この柔らかい桃色の形のいい唇が私の唇に重なるの！　きゃぁぁぁ、想像するだけで気がおかしくなりそう！）

私はいつものように向かいに座るライアン様をチラ見しながら、心の中で悶えていた。それに気が付いたのか、彼が私に微笑みかける。

爽やかな笑顔にドキッとしながらもすぐに目を逸らし、何度も瞬きを繰り返して誤魔化した。

「な、なんだか空気が乾燥しているみたいですね。こほっ。こほっ」

（いやだわ。ライアン様に見惚れていたのを気付かれたのかしら……）

内心ドギマギしている私に、ライアン様は心配そうな顔で答える。

「そうかな？　僕は感じないけど、レイチェルは大丈夫？　目が痛いの？」

ライアン様は身を乗り出して、私の頬に手を当てた。そうして私の顔を覗き込む。

綺麗に通った鼻筋に、男性なのに色気さえ感じさせる魅惑的な瞳。

ライアン様に見つめられて、心臓が激しく打ち鳴らされる。目を逸らそうと思うが、体が固まってできない。

銀色の柔らかい前髪が、緑色の瞳の前をさらりと横切っていく。髪が肌を撫でる音さえ聞こえそうな近さに、ドキドキが抑え切れない。

「……レイチェル？」

どのくらいの時間、彼に見惚れていたのだろうか……。ライアン様の落ち着いた声で、意識が戻ってきた。

「心配してくださらなくて結構です。もう目は大丈夫ですから」

私は彼の手をすぐに振り払って顔を背ける。動揺していたためか、力の加減を誤ったようだ。思ったよりも大きな音を立てて、彼の手を払ってしまった。慌てて様子を窺うと、彼は気にしていないといわんばかりに満面の笑みを浮かべている。

（よ……よかったわ。なんとも思っていないみたい）

私はホッと胸を撫で下ろす。そうこうしているうちに馬車が着いたようだ。

扉が開き、ライアン様が先に降りて私の手を取りエスコートをしてくれる。

王立劇場の入り口は、たくさんの紳士淑女で埋め尽くされていた。足を踏み入れた瞬間、一斉にみんなの視線が注がれる。

「ほう、見てみろ。彼女が噂のハプテル伯爵家の『妖精の人形』だ。本当に人間離れした美しさだな。人形の見た目どおり、傲慢で冷たいらしいぞ」
「あぁ、ライアン様。なんて素敵なのかしら。ご結婚なさったなんて、残念だわ」
様々な人が、私たちを話題にする声が聞こえてくる。
オペラを観にきているとはいえ、その前後の社交も楽しみの一つ。
けれど、誰も私には話しかけない。社交界に出るのを控えるようになってから、たまの外出のときは物珍しいのか、更に遠巻きにされるようになっていた。
ライアン様は、何人かの方に声をかけられている。だけど私が傍にいるせいか、形式的な挨拶を交わすだけで、誰かとじっくりと話すことはなかった。
他の夫婦連れを見ると、みんな和やかに歓談を楽しんでいる。
(社交性のない奥様で、ライアン様に申し訳ないわ)
しゅんっと心が曇る。
王立劇場の入り口を抜けると、そこは劇場前のホールだ。吹き抜けの高い天井からは、豪華なシャンデリアが垂れ下がっている。その下では、色とりどりのドレスで着飾った淑女と礼服に身を包んだ紳士が、楽しそうに談笑していた。
私たちがホールに入ると、人の隙間から女性が現れ、満面の笑みでライアン様の腕に自らの腕を絡めた。
「ライアン！　あなたも来ていたのね！」

ライアン様は一瞬驚いたような顔をした。でもすぐに頬を緩める。
「アレクシア、誰かと思ったら君か」
「ふふっ。ライアンが来るなんて思ってなかったわ。知っていたら、もっといいドレスを着てきたのに」
二人の親しい様子を目の当たりにして、衝撃が走る。
(誰!?　いったい誰なの？　この綺麗な女性は！)
突然現れた彼女は、艶のある腰までのブロンドの髪に青い目の、目鼻立ちのすっきりした女性だ。スタイルのいい健康的な体には、黄色のシルクのドレスがとても似合っている。
人懐っこい太陽のような笑顔と、自信に溢れたその瞳。その全てがライアン様一人に向けられている。彼の隣に立つ私は蚊帳の外だ。
彼らは楽しそうに言葉を交わしたあと、やっと気付いたといわんばかりに、彼女は私を見る。
「こちらがあの有名な奥様ね。初めまして、アレクシア・バートラムと申します。彼が十八歳で騎士団に入った頃から、ライアンとは親しくさせていただいています。彼のことならなんでも知っていますわ。お二人の結婚式には参加できなくて申し訳ありません。ちょうど熱を出してしまったの」
実際に会ったことはなかったが、彼女の名は耳にしたことがあった。アレクシア様の父親であるバートラム侯爵は、ライアン様の所属する騎士団第二部隊の隊長でもある。
(だから、ライアン様と親しそうだったのね。私ったら驚いてしまったわ。でもここはライアン様

の奥様として、そつなく対応しないと）
私は緊張を隠しながら……とはいえ表情に出ることはないのだけれど、完璧なマナーでアレクシア様に挨拶をした。
彼女は形式的に挨拶を返すと、にっこりと微笑んですぐにライアン様に向き直る。そして再び彼と楽しそうに会話を始めた。
私の知らない話題で盛り上がっては、ライアン様が時々声を出して笑う。二人きりのときには見たことがない彼の表情に、見惚れてしまった。
（ライアン様は、こんなお顔もされるのね。新しい発見だわ、ふふ。……それにしても、お二人はとても仲がよさそう）
二人の様子を眺めていると、アレクシア様がライアン様に腕を絡めようとした。ライアン様は、あっさりとその手をほどく。そして彼は私の手を取り、指に口づけた。
指に残る唇のあたたかさに、うっとりする。
「ごめんね、レイチェル。せっかくのデートなのに、寂しい思いをさせてしまったよね」
「――全くそんなことはありませんわ。もっとお話しになってもよろしかったのよ」
ライアン様の優しさに天にも昇る心地だけれど、冷たく突き放す。とはいえ、これは本音でもある。
（私はライアン様のお傍でその姿を見られれば、それだけで幸せなのだもの。うふふ）
ライアン様は私の言葉を聞いて、にっこりと微笑んだ。

「そんな寂しいことを言わないで。アレクシア、今はレイチェルがいるから失礼するよ。今度はゆっくりと時間を取って、レイチェルも一緒に三人で話そう」
「――ライアン！　せっかく会えたのに、もうっ！」
彼女は腰に両手を当てていかにも不満そうな声を出したあと、仕方がないというようにため息をついた。
アレクシア様が何か言いたそうな目で私を見るが、どうしてなのかわからない。
「まぁいいわ。また騎士団でゆっくり話しましょう。今夜は奥様がいらっしゃるものね。では奥様。失礼いたします」
そう言うと、アレクシア様は笑顔を残して去っていった。
それを見送ったあと、ライアン様は私に問いかける。
「開演までまだ時間があるから、飲みものをもらってくるよ。何がいい？　レイチェル」
さすがは気の利く優しい旦那様だ。
でも実のところ、ライアン様が傍にいる緊張感で何も飲める気がしない。でも彼の好意を無駄にはしたくないので、適当に頼むことにする。
「そうですね、お酒を飲むとすぐに眠くなってしまうから、それ以外ならなんでも構いませんわ」
「わかった。少し待っててね」
ライアン様の背中が人混みの中に消えていく。
彼はすぐに、またどこかの令嬢から声をかけられたらしい。複数の女性と言葉を交わしているの

が、人の隙間から見えた。しばらくして別の男性からも、親しそうに声をかけられている。人当たりのいいライアン様の周りには、みるみるうちに人だかりができた。
結婚してから二人で社交的な場に出席したのは、これで三回目。私と離れた途端に、いつもこうなる。
対する私は、一層多くの人にチラチラと見られている。それなのに目が合うと、慌ててどこかに行ってしまうのだ。ライアン様の妻として誰かに話しかけようと思っても勇気が出せず、その場に立っていることしかできない。
(社交的なライアン様は、どこに行っても人気者ね。今までは私が隣にいたから、みんな話しかけ辛かったのだわ。ライアン様は、結婚してからもたくさんの女性に好かれているのでしょうね)
そう考えると、ふと寂しくなってしまった。
(でも仕方がないわ。だってライアン様はとっても素敵な男性だもの……私が独り占めするわけにはいかないわ。……でも、早く戻ってきてくださらないかしら)
彼をひたすら待ち焦がれていると、背後でガラスが割れるような音がする。
それと同時に、女性の声が耳に飛び込んできた。
「何をなさるの！　あなた、どこを見ていたのかしら！　ああ、こんなに汚れているわ。こんなドレスじゃもう観劇は無理ですわ！　どうやって償うつもり!?　給仕の給金じゃ一生かかっても払えやしないわよ！」
それを遠巻きに見ている淑女たちが、ひそひそと話している。

「あれは気分屋だと有名なミデルブ伯爵夫人ですわ」
「まぁ。あの給仕、可哀想に……」
見たところ、どうやら給仕がシャンパンを落とし、ミデルブ夫人のドレスに染みができてしまったようだ。夫人はフリルのついた扇を振り回しながら、烈火のごとく怒っている。
ひたすら頭を下げて謝っている給仕を、夫人はヒステリックに何度も責め立てた。給仕の上司まで呼び出して、謝罪を求めているようだ。
しかしよく見ると、シャンパングラスは夫人よりだいぶ離れた床の上で割れていた。それなら、シャンパンはそんなにドレスにかかっていないはずだけれど。淑女たちは、さらに噂を続ける。
「本当は夫人のほうから給仕にぶつかったのよ。八つ当たりされて、あの給仕は運が悪かったわね」
「ミデルブ伯爵は若い後妻である彼女に夢中で、なんでも言うことを聞くらしいのよ。彼女の機嫌を損ねたらどんな目に遭うかわかりませんわ。給仕は可哀想だけれども、誰も助けられないわね」
そう話す淑女たちのように夫人たちを眺める人はたくさんいるが、仲裁する者は現れない。
ミデルブ伯爵は王国でも影響力のあるお方だ。彼女たちが言うように、夫人の機嫌を損ねてミデルブ伯爵の報復を受け、社交界での立場を悪くすることが恐ろしいからだろう。
(あの給仕さん、可哀想。あんなに辛そうな顔で謝っているわ。彼の責任ではないみたいだし、どうにか助けてあげられないかしら……あぁ、でも私に何ができるの？)
そんなことを考えているうちに、ライアン様が私の隣に戻ってきた。

左手に赤ワイン、右手にオレンジジュースを持ち、彼は夫人を呆れたように見る。
「またミデルブ伯爵夫人か。今夜はいつにもまして虫の居所がお悪いようだね」
ライアン様がやれやれとため息をつく。それを見て、私は腹を括った。
ただの貴族ならば、夫人にたてつくことはできないだろう。けれども、ハプテル伯爵家はミデルブ伯爵家以上の権力を持つ名家だ。今は家を出ているけれど、私に対するお父様とお兄様の溺愛ぶりは社交界でも有名。そんな立場の私なら、何かできるかもしれない。
(怖いわ、でも……でも、こんなの黙って見ていられないもの)
「……」
私は無言でライアン様の左手にあるワイングラスを取ると、ゆっくりと足を前に進めた。
そして夫人の右斜め後ろにそっと立つ。夫人は文句を言うことに夢中になっていて、私に気が付いていない。
夫人が怒りにまかせて扇を振り上げた瞬間、その端が私の肩に当たった。同時にワイングラスが傾いて、その中身が零れる。鮮やかな赤色の液体が、私のドレスをぐっしょりと濡らす。オーガンジーの淡い青色のドレスが、一瞬でワインの色に染まって紫色になった。
その場にいた全員の視線が、一斉に私に注がれる。
「……な！　なんですの⁉　あ、あなた！　何をっ」
夫人は何が起こったのか、まだ理解できていないようだ。彼女は私の顔を見ると、さっきまで怒り続けていた口を閉ざした。呆気に取られた夫人の顔を、私は無感情の目でじっと見つめる。

「あら、申し訳ありませんわ、ミデルブ伯爵夫人。あなたのドレスにもワインがかかったようです。私のドレスも台なしですし、困りましたわね。どう償えばよろしいかしら？」
「――ひっ！」
夫人は青ざめ、恐怖の表情を浮かべた。普通に話していても、人形のようで背筋がゾクリとすると言われるのだ。今は意図して威圧感を込めているのだから、それ以上だろう。
けれども本当は、心の中でうさぎのように震え上がっていた。
(あぁ、神様っ！　夫人に何も言い返されませんように……)
彼女に何か言われると怖いので、先に駄目押しをしておく。
「夫人のドレスのお代は、もちろんわたくしが全額お支払いいたしますわ。けれど、ドレスの一着や二着、そんなに大声をお上げになるほどの金額ではありませんでしょうに」
(きっと夫人のドレスはとてもお高いに違いないわ。せっかくライアン様のために貯めたお金がなくなってしまう。なんて辛いのかしら……)
落ち着き払った冷たい態度を心がけるが、お金のことが心配で胸の中は暗雲が立ち込めている。
すると、夫人が顔を真っ赤にして叫んだ。
「ハプテル伯爵令嬢、お支払いは結構です！　これはお金の問題ではありませんのよ！　この人たちがきっちり自分の仕事をしないからいけないのですわ！」
「いいえ、ミデルブ伯爵夫人。もうハプテル伯爵令嬢ではありませんわ。私はレイチェル・ブルテニアです。二か月前に結婚式を挙げましたの。もちろんご存じですよね。それと――」

私はもう一度何か言おうとする夫人の目を、冷静にじっと見据えた。心の中では夫人のドレス代を払わなくてよくなって、ホッとする。
「――淑女が感情を表に出すのは、はしたないことでしてよ」
「くっ！」
夫人は口をつぐんで、悔しそうに唇を噛んだ。人形と呼ばれる私に言われたのだ。言い返せるわけがない。そのとき、ちょうど誰かと歓談を終えたミデルブ伯爵が戻ってきた。
「どうしたんだい？　愛しいテレーシア。この騒ぎは一体？」
伯爵は、どうして夫人が周囲の注目を集めているかわからないようで、キョトンとしている。
「オペラを観る気がなくなりましたわ。屋敷に戻らせていただきます！」
夫人は捨て台詞を残すと、かぶりを振って私に背を向けた。そして、困り顔の伯爵と一緒に人波の中に消えていった。その場に残された給仕とその上司が、私に向かって頭を深く下げる。
でも私は、内心それどころではなかった。夫人との対立を終えた安堵もあるが、それ以上にとても重要な問題があったから。
仕方がないとはいえ、ドレスにワインをかけてしまったのだ。このままでは染みが残ってしまう。
（あぁ困ったわ、赤ワインじゃなくて白ワインだったらよかったのに！　このままじゃこのドレス、もう二度と着られなくなってしまうわ。――そうだわっ、白ワインよ！）
「あの、助けていただいて、ありがとうございい……」
「――早急に、ここに白ワインを持ってきてください」

私が給仕のお礼に被せるように言うと、彼は言葉を途中で切り、頭を上げて目を丸くした。
「……はい？」
「ですから、白ワインを早く持ってきてくださいませ」
もう一度強く言うが、彼は困惑したまま動かない。
すると、無表情で白ワインをねだる私に恐れを抱いたのか、別の給仕が慌てて持ってきた。白い透明の液体を見て、ホッとする。
「割れたグラスをそのままにしていては危なくてよ。早く片づけたほうがいいと思いますわ」
私は給仕にそう言い残すと、白ワインを持ってその場を離れた。
（ゆっくりしている時間はないわ。急がないと染みが残ってしまうもの）
日々、侍女の仕事を知るにつれ色々と学んだことがある。赤ワインの染み抜きには、白ワインが最適なのだ。
すぐに化粧室に駆け込み、持っていたハンカチに白ワインをつけて染み抜きをする。何度も根気よくぽんぽんと叩くと、ようやく赤い色素が取れてきたようだ。赤ワインと混ざって紫色になっていた生地が、若干もとの青色に戻ってきた。屋敷に戻ってもう一度手洗いすれば、きっと染みが取れるに違いない。私はホッと息を零す。倹約生活では、ドレスの一枚も無駄にできない。
（それにしても、夫人に弁償しろって言われなくてよかった。お金がないわけじゃないけど、今貯まっているお金で、ライアン様のシャツを買うつもりだもの。あぁ、その上にかっちりとした詰襟の紺色のスーツを着て、黒いブーツを履いていただいたら、素敵に違いないわ。ネクタイは赤がい

いかしら……それとも青……ふふっ、考えるだけですごく楽しいわ）
しばらく妄想に悶えたあと、ある程度染みが取れたことに満足して化粧室を出る。
すると扉を出てすぐの廊下に、ライアン様が立っていた。私を待っていてくれたようだ。
彼は私に気が付いた途端、満面の笑みを浮かべる。
「――レイチェル！」
初物のオレンジのような爽やかな笑顔が、私だけに向けられている。
思わず胸の奥がきゅぅぅんと、ときめいた。
（やっぱり訂正するわっ！　ライアン様だったら何を着ても素敵！　あぁ、格好いい！　彼が私の旦那様なのよ！）
「残念だけど、もうオペラは始まってしまったらしい。途中の休憩時間になったら入場できると思うけど、どうする？」
ライアン様の言葉に、浮かれた気分が一気に盛り下がる。せっかくのデートだったのに台なしだ。
（あぁ、辛いわ。今日のオペラ、二週間も前から楽しみにしていたのに……）
涙が出そうな気持ちだが、私の瞼は乾いたままだし、相変わらず表情には全く出なかった。
オペラの上演時間は、休憩を挟んで三時間半。
プログラムでは、オペラの前半が終わるまで一時間半かかる予定だ。
私はライアン様と一緒ならばいくらでも待てるが、そんなに長く彼を待たせるのは悪い。
それに、「どうする？」と尋ねてくるということは、待つのは嫌に違いない。ここは私が、ライ

アン様のために我慢しよう。
「そうですか。でしたら屋敷に戻りますわ。待つのは嫌いです」
「そう？　レイチェルがそう言うなら帰ろう。でもせっかくだから、少し寄り道をしない？」
ライアン様はそう言って、緑の目を輝かせて私の手を取った。最愛の男性にそんな目で見つめられて、さっきから心臓がドキンドキンと鳴りっぱなしだ。
オペラを観られなくなった悲しさが、一気に吹き飛ばされる。
ライアン様が馭者に行き先を告げると、一呼吸おいて馬車が動き出した。外は日が落ちて、すでに真っ暗。道の脇に並ぶ家の灯りに照らされ、馬車の影が長く伸びていた。
馬車が石畳の道路をガタゴトと進んでしばらくすると、町の外に出たのか車輪の音が変わった。
柔らかい土の振動を感じながら、私は向かいに座るライアン様の整ったお顔を時々盗み見ている。
いつどの角度から見ても、彼の容姿は完璧だ。
（あぁ、私の旦那様。すごく素敵ですぅ！）
顔は無表情のまま、心だけだらしなく惚けてしまう。
「ほら、ここだよ」
やがて馬車が停まって、ライアン様が先に外に出た。
彼に手を引かれて馬車から降りると、眼前に幻想的な風景が広がっていた。
大きな湖の畔には、白くて背が高く細い葦がたくさん生えていて、時折吹く穏やかな風でゆらりと揺れている。天上と水面にはそれぞれ丸い月が一つずつ、闇の中とは思えないほど周囲を明るく

照らしていた。湖を取り囲む木々の緑が、ぼんやりと浮き上がっている。その間を、ポプラの木から散る白い綿ボウシが、まるで初夏に降る雪のように舞い落ちてきた。
まるで絵本の中の世界のようだ。
「ここは？」
私が聞くと、ライアン様がにっこりと笑う。
「この間仕事で通ったときに、偶然見つけたんだ。この光景をレイチェルと一緒に見たくて。気に入ってくれた？」
ライアン様が私を抱き寄せた。頬に彼の硬い胸が押しつけられる。
（嬉しい！　あぁ、なんて嬉しいのかしら。もちろんこの景色も素敵だけれど、私のことを考えてくださるライアン様のお気持ちのほうが、ずっと嬉しいわ！）
そのとき、今朝のベリルの言葉が脳裏によみがえる。
（そうだわ。試しにベリルの言っていた『デレ』を、ほんの少しだけやってみようかしら。でも少しデレるってどうすればいいの？　表情を変えるのは不可能だから、言葉で伝えればいいのかしら？　『ちょっとだけライアン様を愛しています』とか？　でも、言って嫌がられたらどうしましょう！）
それでも、溢れんばかりのこの想いをライアン様に伝えたい。それに、ツンだけでいつか飽きられてしまうのも辛いのだ。
私は持ちうる限りの勇気を振り絞って、ライアン様の顔を見上げた。心臓がどきどきして呼吸が

苦しくなるが、なんとか大丈夫だ。
すると、ライアン様は銀の髪を風になびかせて、切れ長の目で私を熱く見つめ返した。
愛するライアン様が、私だけを見つめてくれている。それだけで胸が高鳴って動揺し、自分の心臓の音しか聞こえなくなる。
言葉で想いを伝えようと思うのだけれど、興奮しすぎて声が出ない。
「――レイチェル、愛しているよ」
私より先に、ライアン様が愛していると言ってしまった。
慌てている間に彼は私の頬に手を当て、端整な顔を近づけてくる。それは私の心を惑わすには充分だった。
（きゃぁぁぁ、キスだわ！　朝は避けてしまったものね。だからもう逃げないわ。きちんと唇にキスしていただきたいもの！　絶対に首を動かしては駄目よ、レイチェル！）
けれどもテンパってしまった私は、無意識に一歩後ずさってしまう。
そこで、足の下にあるはずの地面がないことに気が付いた。時すでに遅く、私は湖の中に落ちる。
ばしゃぁぁんという大きな水音とともに、ライアン様の叫び声が聞こえた。
「レイチェルっ！」
（いやぁぁぁっ！　水の中なの!?　私、泳げないのよ！　助けてっ！）
パニックになっていると、もう一つ大きな水音が聞こえた。ライアン様が水に飛び込んだのだ。
すぐにライアン様に引き上げられ、二人で立ち上がる。

「はぁっ、はぁっ、レイチェル！　大丈夫？」
ライアン様は腰ほどの高さ、私は胸のあたりまで水に浸かっていた。湖の底は思ったよりも深くなかったようだ。
（助かったわ！　死ぬかと思ったもの！　つ、冷たーいっ！）
安心したら、水の冷たさに驚く。睫毛からぽたぽたと、滴が連続で落ちていった。
「……これは……七月とはいえ、夜泳ぐにはまだ寒いですね」
命の危機さえ感じたのに、全く表情には出ない。内面の動揺を悟られまいと慎重に抑揚のない声を出す。
「ふっ……君は本当に」
顔を上げると、すぐ隣に月の光を浴びて銀色にキラキラ光るライアン様がいた。彼は頬を染めて苦笑している。
「普通の女性は、ここで取り乱すものだよ。意外性のある君が大好きだ。僕はね、ありのままのレイチェルを好きになったんだ。こんなに可愛らしい女性は他にはいない」
（可愛らしい？　美人だとか人形のように綺麗だとかはよく言われたけれど、可愛いなんて初めてだわ。……でもやっぱりライアン様は、どんなときでも取り乱さない『妖精の人形』の私がお好きなのね）
もしデレていたら、嫌われてしまっていたかもしれない。ホッと安堵する。
体中から水滴を滴らせている彼は、いつにもまして悩殺的だった。

ドキンと心臓が跳ねて胸が痛くなる。
（それにしても、ライアン様の頬を伝って首筋に流れる水滴……なんて官能的なのかしら。あぁ、男性の色気ってこういうものをいうのね。ほぅっ）
自分もずぶ濡れだということを忘れて、見惚れてしまった。私がチラチラと見ていることに気が付いたのか、ライアン様が笑顔のまま顔を近づけてきた。
熱いキスが唇に落とされる。
水に濡れて冷たいはずなのに、その瞬間唇が火を灯されたように熱くなった。
小さな熱はじわりじわりと全身に広がって、指先まであたたかい幸福で満ちる。
（ライアン様の体は筋肉でこんなに硬いのに、唇はなんて柔らかいのかしら……ライアン様も、私と同じ幸せを感じてくださっているのかしら……？）
水の中に半身を浸し、星が降りそうな幻想的な光景の中、私たちはキスをした。何度も繰り返される情熱的なキスに、全身がとろけそうになる。
ライアン様が唇をいったん離して、熱い息を零した。
「はぁー、『妖精の人形』……か。こうして月をバックにしていると、君は本物の妖精のようだね。まるで自分が不道徳なことをしているような気になるよ」
「教会が認めた夫婦間の口づけは、不道徳ではありませんわ」
「そうだね、だったらもう一度キスしてもいいかな？　もう我慢ができそうにないよ。湖に浸かっている君はこの世のものではないみたいで、こうして捕まえておかないと、どこかに行ってしまい

そうだ」
そう言うとライアン様は私の肩を抱いて、もう一度キスをした。深いキスが何度も繰り返される。ライアン様は悩ましく舌を絡めては、名残惜しそうに唇を離す。
最後にくちゅりと音がして……ライアン様のお顔が離れていった。私は唇に残された最後の熱を、切ない気持ちで噛みしめた。
それから私たちは馬車に乗り、全身濡れたまま屋敷に戻る。
馬車が到着するなり、ライアン様はひざ掛けに包まれた私の体を横抱きにした。そうして何も言わずに自分の寝室に向かうと、奥にある扉を開けてバスルームへ行く。
すでに湯船には、あたたかいお湯が張られていた。
ベリルが私たちの帰りの時間に合わせて、用意してくれていたのだろう。
「早く体をあたためないと風邪を引くよ。せっかくだから一緒に風呂に入ろうか」
服が濡れていても、全く寒くなかった。
それどころかライアン様と密着しているというだけで、興奮して体が火照ってくる。
ライアン様は笑顔で私を横抱きにしたまま、まずはパンプスを脱がせた。そして床に膝をつくと、それと反対の足に私を座らせる。
彼の長い指が、ドレスのボタンを一つ一つ外していった。そのたびに、彼の熱い吐息が直接胸にかかる。それから、水に濡れて肌に張りついた下着の胸元を、ゆっくりと広げる。空気に晒されて乳房が揺れた。

立ち読みサンプル
はここまで

ライアン様の視線が胸に移ったのがわかって、恥ずかしくて気が遠くなりそうになる。私はいつもの無表情のまま、彼の顔を見上げた。
ライアン様の顔は熱を孕んでいて、いつもとは違う情欲の高ぶりが見て取れる。
(あ……もしかして今夜は抱いてくださるのかしら。嬉しい、嬉しいわ)
そんな予感に胸を高鳴らせるが、表情には出ない。
「レイチェル……」
ライアン様が熱い眼差しで私を見つめた。そして緑の目を細めて、切ない表情を浮かべる。
彼は無言で私の下着を脱がし、裸になった私をそっと湯船の中に下ろした。
全身に湯の温もりが広がるが、ライアン様に抱かれていたときのあたたかさのほうが数倍も心地よかった。急に寂しくなって、湯船の傍に立つ彼の姿を切ない気持ちで見上げる。
そのときふと、ガラスに映った自分の顔に気が付いた。
それはまるで陶器の人形そのもの。愛する旦那様に抱かれる直前だというのに、表情は一切崩れない。
(なんて真っ白で感情がないのかしら。まるで美術館の彫像みたい……)
こんなときでさえ感情を表せられないことにショックを受けるけれど、なんとか自分を納得させる。
(でも、でも……ライアン様が、ありのままの私を好きだと言ってくださるのだから。それでいいのよ、レイチェル!)